

ベストクラス候補選定理由書

作成者：吉水裕也・石橋由紀子・山田真誠・藤本哲也・吉田究

科目名称	国語系教育内容論Ⅳ（古典語）（夜間クラス）		（担当教員名： 田中 雅和）
課程	学部・大学院（ <u>修士</u> ）・専門職	開講時期	（ <u>前期</u> ）・後期
授業形態	講義	授業規模	30人以下
インタビュー対象教員名 田中 雅和 （実施日時：2019年7月30日（火）11時00分～11時45分；実施場所：教員研究室）			
インタビュー対象受講者名 桑原 博美 （実施日時：2019年7月27日（土）16時00分～16時45分；実施場所：言語棟 院生研究室）			
<p>選定理由</p> <p>本科目は、「国語教育に携わる者の基本的な専門知識」として、「文字を媒材とした表現行為と理解行為を中心に歴史的に考究」し、「言語表現の成立・機能・類型や特性を理解」することを目的とした授業である（「」内はシラバスより）。夜間の授業であるため受講生は少ないが、毎時それとほぼ同数の聴講生（前年度までの既履修生、昼間の講座を受講している学生）があり、彼らを含めた授業アンケートの数値、自由記述の分量、何よりその内容から、充実した教室の様子が窺える。</p> <p>受講生にインタビューを行ったところ、以下のような話を聞くことができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> * 中国からの漢字の輸入、受容・定着の変遷、仮名の誕生…。日本における漢字使用の歴史について深く学ぶことができた。毎回の講義にドラマがあり、感動の連続だった。頭の中が常に活性化されていた。 * 辞書の使い方（見方・活用法）についても学んだ。この講義を受けた影響で、街中で目にする看板等の文字や用語、テレビや新聞等で用いられる語彙などについても、これまで以上に敏感になった。 * 所属校での授業（高校・国語）にも具体的に反映させることができた。また、学校長から依頼を受け、漢字問題の採点について職員研修を実施した。学校全体の意識改革に繋がった。 * 夜間では同じコースの学生は学年1人だったのだが、他コースの人が受講していて刺激的だった。日本語を中心に話題が広がり、講義外での自主研修にも発展した。聴講生も熱心な方が多く影響を受けた。また、担当教員に話を伺うと――。 * 以前は日本語の生きた姿の面白さを伝えようと、文体史、文字史等を中心に扱っていたが、今は学生の要望にも配慮をし、大学院で学んだ専門知識が現場の授業にどう生きるか、そのために工夫できる知恵なども紹介するようにしている。ただし、現職の人が重要視しがちな実践的な授業力・テクニック・方法など以上に、（国語）教師が本来持つておくことが望ましい語感とか言葉に対するアンテナ、引っかかりを放置しない姿勢をこそ大事に思っている。子どもも教員のそんな姿を見て学ぶのだから。 * 毎年同じ思いだが、現場に戻って試したくなるようなことは盛り込むが、明日すぐに役に立つことを必ずしも重視してはいない。長く使える材料、将来的に（個々が／個々に）アレンジできるものの見方・考え方、教材研究のための基礎力を刺激するように心掛けている。すぐ使えるものはすぐに使えなくなる。すぐ使えないものは長く使えると考えている。 <p>冒頭で触れた授業後のアンケートに寄せられたコメントには、専門的な内容に対する関心とともに、「現場」での実践との関連に触れた記述が多く、また、国語（教育に携わる）教師の心構え・姿勢のような内容に触れたものも多く見受けられた（昼間にも同タイトルの講義が開講されていたのだが、アンケート結果は全く同傾向であった。）。担当教員の狙い通り、大学院で学ぶ専門知識と学校現場での実践を架橋する授業内容であったと思われるので、ベストクラス候補に推薦する。</p>			